ペン俳句会　句会報（三五十五号）

令和六年四月四日（木）

兼題『恋猫』、席題『寝』

句会を、今年三月と同じ場所で開催。出席は十一名。（投句十二名）

宮原　凪

行く人に残れる人にさくら舞ふ
花日和いっせいに押す降車ベル
丑三つを目覚めさせたり恋の猫
読みかけの句集と添ひ寝春の月
背後より散華のやうに舞ふさくら
老木の瘤の力や桜咲く

中村　晃也

浜東風や寝釈迦のやうな島の影
のどけしや添い寝の嬰の大欠伸
ライバルの気配伺ふ恋の猫
近づけば知らぬ顔する恋の猫
蝌蚪生まれ生存競争始まれり
潮騒は風の伝言啄木忌

松田　一文字

蹲踞の水面や花の二三片
恋猫の声かまびすし雨の夜
花筵友ら今年は二人亡く
暖かや猫寝入り込む塀の上
菜の花や輪を描く鳶の空真青
春光や川瀬見詰める鷺一羽

内藤　まりこ

タバコ買ふ夫(つま)を待つ間の花見かな
蓬生や大の字に寝て瞳閉じ
帰り来て木に爪たてる恋の猫
春景色シルバーパスでバスの窓
庭仕事手を止め見入り緑摘む
花見席一番競う桜話（ばな）

新田　ゆふき

咲き終へて仕事顔なり梅畑
蛙鳴く棚田跡とふ野を踏めば
帰り来る恋猫小さき鼓動かな
浅き夢うつつに浮かぶ朝寝床
催花雨に暮るるひと日の夕餉かな
山道に菫花数ふ声愉し

志村　良知

木々は皆パステルカラー四月めく
うたた寝の醒めて身震ひ春更けど
花見会迫り気を揉む朝の空
果てしなく菜の花盛り続きけり
三毛一歳恋の予感にそはそはと
空に溢るミモザ大樹はただならず

森田　元斐

累代の願ひを重ね雛の段
沈丁の早や忍び込む雨上り
リフォームのペンキ塗り立て春一番
春疾風いつも登りの丘の上
春風のページをめくる時刻表
恋猫の屋根わたるらし夜明け前

長尾　進一郎

恋猫の低く鳴く声縁の下
土産店に照る照る坊主花の雨
春暁や時計横目に二度寝せり
水平線の紅の失せゆく春夕焼
ゆっくりと集まり離れ春の雲
ファインダーで我が子を探す卒業式

大津　そうかい

春眠し吾呟けば妻もまた
春暁や陋屋燦と光り満ち
其の上の寝癖の苦労鳥雲に
春炬燵昭和の名残抜け出せず
恋猫や追うて屋根より落ちし人
春寒や吸殻多きベンチ下

安藤　晃二

呆れけり秘めやかならぬ猫の恋
春の宵雌追ふ雄のけたたまし

床を擦る猫に春日やガラス越し
梅散って梅園の寂び木の芽待つ
三椏の優しき花や入日映え
春寒や木香薔薇の房数へ

浜口　金魚姫

散る花を水面に浮かべ花手水
寝転べば吾の指先に蒲公英黄
恋猫よあてまげの道迷い道（大阪府富田林市寺内町）
浮き寝鳥ほどの近さの老夫婦
足踏みて歩数を稼ぐ菜種梅雨
春の夜猫尾を立てて我を恋ふ

西川　知世

初桜十を数へて戻りけり
春の噴水青年の打つタンバリン
姥桜空を目指しつ静もりぬ
乾門の石組み古び花の昼
春暁や寝台列車の階狭く

次回は令和六年五月二日（木）、
兼題は季語「鶯」（宮原凪さん出題）、
席題は西川知世さん出題の「巣」です。

追記

季語を学ぶ　初学にかえって

西川　知世

鶯は春告鳥（はるつげどり）・匂鳥（においどり）歌詠み鳥（うたよみどり）と名を変え、傍題には鶯の初音・鶯の谷渡り、と鳴き声も鶯の季語にはいる。ヒタキ科。体長は一五センチぐらい。

しかし、色は茶褐色でかなり地味で、藪の中に生息して人目をひく鳥ではないので、実物をみることはあまりない。ホーホケキョというさえずりが馴染み深い鳥である。うぐいす色という言葉があるが、実際には茶褐色に近い地味な羽色であるそう。ホーホケキョというさえずり、キキキョという谷渡り、チャッチャッという笹鳴きという鳴き声があり、俳句にも鳴き声を詠っているものが多い。春のさきがけとして、山から里に下りてきて鳴き声がうつくしく、姿のよい数多くの俳句が残されている。

鶯や餅に噴する縁の先　芭蕉
鶯の身をさかさまに初音かな　其角
鶯に終日遠し畑の人　蕪村
鶯や山をいづれば誕生寺　子規
鶯や前山いよゝ雨の中　水原秋櫻子
鶯や焼土の果に人は立つ　加藤楸邨
うぐひすに瀧音笑ひつゝ暮るる　飯田龍太
鶯に蔵をつめたくしておかむ　飯島晴子
鶯のこゑ前方に後円に　鷹羽狩行
うぐひすのケキョに力をつかふなり　辻　桃子
うぐひすに冷たき舌のありぬべし　夏井いつき
修復の成りし仁王に初音かな　中田千恵子